

陸奥国風土記散歩2

陸奥と渡来系官人・続

—百済王敬福・坂上田村麻呂を中心に

寺岡洋

黄金貢進と百済王敬福のネットワーク

前号では百済王(くだらのこにきし)敬福が黄金九百両を得た黄金山(こがねやま)産金遺跡(宮城県遠田郡涌谷町)、東大寺大仏造立に関わった国中連公麻呂(くんらかのむらじきみまろ)・行基(ぎょうき)・良弁(ろうべん)などの渡来系官人・僧、天平年代の渡来系関連人物を並べた簡単な年表、多賀城跡(宮城県多賀城市)などを紹介しました。

今回は百済王敬福の黄金九百両貢進の時期、タイミングについて憶測を交えた私説を述べます。ワンフレーズに倣えば、特ダネを狙いすまして新聞発表したようなものだ、と推測されます。

まず、百済王敬福が黄金を貢進した749(天平21・天平感宝元・天平勝宝元)年までの大仏造立の経緯、百済王敬福の履歴を並べてみます。聖武天皇の病状も関連すると思われる所以付記します。

738(天平10)年ころ

百済王敬福、陸奥介(「官人歴名断簡」)。

739(天平11)年 昇叙(『続日本紀』)。

正六位上→従五位下(百済王敬福の初見記事)。

743(天平15)年 陸奥守に、46歳。

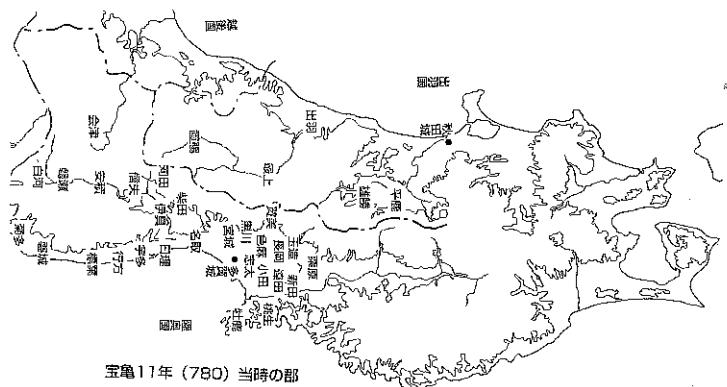
745(天平17)年 平城京に遷都。大仏造立を目的とする官司、造仏司の設置。造仏長官に国中連公麻呂(「正倉院文書」)。平城京の東で大仏工事開始(『東大寺要録』)。

746(天平18)年 百済王敬福、上総守に。同年、陸奥守に再任。従五位上に。

747(天平19)年9月 鑄造開始。大仏の本体(仏身)を8回の鑄継ぎにより鑄造。

749(天平勝宝元)年2月 陸奥国黄金を貢進。

750(天平勝宝2)年4月 聖武天皇、東大寺行幸。産金を大仏に告げる。天平感宝に改元。東大寺の初見。



百済王敬福 徒五位上から従三位に。

749年5月 陸奥国の産金関係者に叙位。

〃 7月 孝謙天皇即位。天平勝宝に改元。

〃 10月 仏身の鑄造完了。

本体の修復、研磨、銅座・騎侍・螺髪の鑄造と並行して大仏殿建立始まる。大工・猪名部(いなべ)百世。

750(天平勝宝2)年 百済王敬福、宮内卿に。

752(天平勝宝4)年2月 陸奥国、多賀以北の諸郡の調・庸を布から金に変更する。

〃 3月 鎔金開始。

〃 4月 大仏開眼供養。

〃 5月 良弁(ろうべん)初代東大寺別当に。

762(天平宝字6)年ころまで鎔金作業続く。

聖武天皇の病状に関しては、

745(天平17)年 このころ、聖武天皇、体調悪化。橘奈良麻呂のクーテタ事件(757年)の際、「去る天平十七年、先帝陛下、難波に行幸せしどき、……殆ど大漸(危篤)に至らんとす。」「…聖体、宜(よろしき)に乖(たが)へること多く歳序(さいじょ)を経たり。」と語られている。

751(天平勝宝3)年 聖武、体調不豫(ふよ)のため新薬師寺で斎会(続命の法)を行う。752年、大仏完成途上に開眼会を行ったのは聖武の病状を考慮したといわれる。

この時、渡来系の医師二人が叙位されている。吉田連(きちたのむらじ)兄人が従五位下、答本(たほ)忠節が外従五位下。答本忠節は当時、医師として著名であったようで、「薬法を問はんがために答本忠節が宅に詣(いた)るに、…」との記事もある。

答本忠節は665(天智4)年、「達率(だちそち)答(たほ)春初(とうほんしゅんぞ)を遣(まだ)して、城(き)を長門国に築(つ)かしむ」と記される百済亡命貴族、答(たほ)春初の一族とみられる。世代で言えば國

中連公麻呂と同じ孫の世代であるが、直系かどうかは確認できない。橘奈良麻呂の謀反に連座し刑死。

吉田連兄人も671(天智10)年、答^{タメ}春初など亡命貴族と共に官位を得た達率・吉大尚(きちだいじょう)の子孫か一族。吉大尚は、「薬を解(い)れり」と特記される。ちなみに、答^{タメ}春初は「兵法(つはもの)に閑(なら)へり」だった。724(神亀元)年に「吉」から「吉田連」に改姓された。『新撰姓氏録』では、任那あるいは加耶の己汶(こもん)出自と読める。吉(きち)と吉士(きし)は同意で、古代朝鮮では首長を意味するとされる。

756(天平勝宝8)年 聖武上皇死去

年表を見ると、大仏造立を発願した聖武天皇は大仏を造りはじめた745年時点、すでに体調を崩していたようである。それも相当重症とみられる。

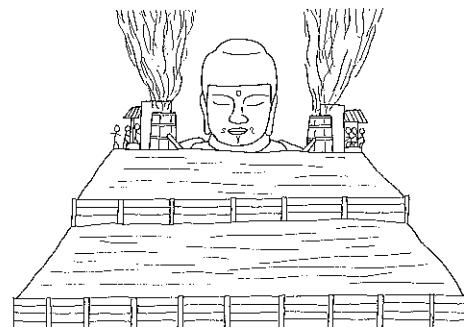
さらに、侍医とでもいうべき掛け付け医師二人は共に亡命百済人三世であり、聖武天皇の病状は百済人三世の造仏長官である国君麻呂(國中連公麻呂)や、百済人グループの宗家ともいえる百済王敬福、さらに東大寺(金鐘寺)のトップである良弁などには伝わっていたと推測される。聖武亡きあとでは黄金貢進の効果は激減するであろうから、敬福らは貢進時期を図っていたと考えられる。

大仏造営作業

黄金貢進の報告が太政官に届いた749年2月段階は、鋳造が始まって3年目の最終段階であり、大仏は頭部まで土の山に覆われていたであろう。

鋳造にはまず原型の塑像を造り、下から順番に鋳型を造り、この作業を8回繰り返しながら頭部まで鋳継いでいく。鋳型を造ると原型(雄型)を銅の厚みだけ削り取り、そこへ銅を流し込む。大仏の銅の厚さは意外と薄く、現在の大仏ではわずか5cm程度だそうだ(『図録 大仏開眼—東大寺の考古学』樋原考古学研究所 2000)。

大仏の材料は銅と錫と鉛の合金で、銅は長門の長登(ながのぼり)銅山(秋吉台の周辺)で採鉱・製鍊されている。銅の採掘には秦氏が関連すると推測される例があるが、長登銅山跡から多く出土した木簡では秦氏の関連者は見られない。ただ、銅を豊前門司(通過する船をチェックする役所)宛てに送ったものには「秦部」「宇佐恵勝(すぐり)」がある(『長登銅山跡出土木簡』山口県美東町 2001)。



下から順に8度にわけて鋳造する。

大仏は10月に鋳了した。その時点までに大仏を覆っていた巨大な鋳型を崩して大仏殿回廊の西側の谷に廃棄し、大仏の威容が現れたのであるが、鍍金のための作業が続く。鋳造の手直しである鋳掛けや、欠損部分の補修、余分な部分の切削、表面の研磨などが必要であり、現代の複製品(レプリカ)の製作でもこの後工程に手間暇が掛かるそうだ。

鍍金作業

「華厳経」の教義によると、「盧舍那仏の仏身から放たれる光明が人々を救う」とあるそうで、鍍金はどうしても必須のものであったのであろう。

鍍金は金アマルガム法という技法が用いられた。金を水銀に溶かし、ペースト状の金アマルガムという化合物をつくり、これを大仏の表面に塗布し、炭火で熱すると水銀が飛んで金が残る。水銀が蒸発する際には有毒ガスが発生する。巨大な大仏の鍍金には58,620両(推定 821kg)の水銀を消費していることから、平城京の住民にも深刻な公害をもたらしたのではないかと想像されている。

鍍金作業がいつまで掛ったか、『東大寺要録』に記載はないが、吉川貞司氏によれば、「鍍金作業には約11年を要して、762(天平宝字6)年前後によく終了した」と推測されている(『国際交易と古代日本』『京都と北京—日中を結ぶ知の架橋—』角川学芸出版 2006)。

黄金九百両の重み

黄金が貢進された749年という年次は足かけ3年の難工事の末、ようやく大仏本体の鋳造見通が立った段階である。そして、次は鍍金という切迫した課題が未解決な状況でもあった。

百済王敬福はこの時期こそがもっとも政治的効

果があると判断し、切れを切ったというのが私説になる。金が貢進されたことにより、聖武天皇はこれで大仏は完成したのも同然、身体の調子も悪い（「寝膳豫（よ）に乖（たが）へり」と、退位してしまうくらい劇的効果があった。

当時、必要とする金は「貿新羅物解（はいしらきぶつけ）」に見られるように新羅との交易で入手したと思われる。『東大寺要録』によれば、鍍金に使用した金の総量は 10,446 両（推定 146 kg）とされ、交易品に見られるような伍両、十両という単位とは桁違いの莫大な量が予想されていた。聖武天皇の意（「衆人（もろびと）は成らじかと疑ひ、朕（われ）は金（くがね）少なけむと憂ひつつある」）を受けた時の政府が必死で探したのは想像に難くない。そういうタイミングであった。

聖武は、「黄金（くがね）は……斯（こ）の地（くに）には無き物」と大仏に告げたが、日本列島で金がまったく産出しなかったわけではない。百済王敬福に先んじること半世紀、701（大宝元）年、「凡海宿禰鎌（おほしあまのすくねあらかま）を陸奥に遣して、金を治せしむ」と陸奥の地で採金した実績がある。敬福は陸奥介としてこの情報を知る立場にあったし、金についてはむろん関心あったであろう。

陸奥介赴任 金貢進まであと 10 年？

鍍金に消費された金が 10,446 両で、吉川論文によれば、鍍金作業に約 11 年要している。つまりその間、年に 900～1,000 両の金を供給できる体制が陸奥国で整えられたことになる。このような体制が整備される前、多賀城にあった陸奥国守・百済王敬福はどのような手段で、1 年分にも相当する 900 両の金を入手できたのであろうか。

参考までに貢進後の政府の金獲得手段をみると調・庸という租税に依ったようである。敬福の金の貢進から 3 年後、752（天平勝宝 4）年、「陸奥国の調庸は多賀以北の諸郡には黄金を輸さしむ。その法は正丁四人に一両」としている。調・庸は人頭税で、どちらも各地の特産物や麻布を都へ貢納するものであるが、それを金で徵収したのである。まさしく文字通り「税・金」である。

しかし、政府が調庸に充当するため虎の子の金の私採を認めたとは考えにくく、近世の石見銀山や佐渡金銀山などと同様に、産出地を厳重に囲い込み、陸奥国の管理のもとに採掘したのではないだろう

か。交易雑物というやり方、対価（現物貨幣である布）を支払って入手する方法もあるが、いずれにしても陸奥国の管理下であろう。

もし、このように多賀以北の諸郡の公民を動員してようやく一年に 900～1,000 両の金を確保できたのであれば、このような体制がなければ何倍もの時間が必要になる。資料がなく憶測になるが、百済王敬福が陸奥介あるいは守に赴任・昇任したころから金の探査は行われ、747 年、大仏の铸造が始まったころには陸奥国の事業として採金に取組まなければ 749 年 2 月の金貢進は時間的に無理なのではないか、と考えられる。

百済王敬福の伝記・「薨伝（こうでん）」

百済王敬福は 766（天平神護 2）年、年六九、從三位刑部卿で薨（こう）じ、長文の伝記が『続日本紀』に記されている。百済義慈王からの系譜、百済滅亡の経緯などに続き、敬福の人となりや業績を簡潔にまとめている。

「……放縱（ほうしょう）にして拘（かかは）らず、頗る酒色を好む。……時に士庶來りて清貧を告ぐるあれば、毎（つね）に他の物を仮りて望外にこれを与ふ。是によりて頻りに外任を歴るも家に余財なし。然して性了弁にして政事の量あり。……」

「小事にこだわらず、酒色を好み、気前がいいので国守を歴任したのに財を残さず、政事については見識雅量がある。……」というような人物であろうか。百済系はむろん広く渡来系氏族の棟梁として惜しみなく分け与えるので人も情報も集まってくる。余財がないと言っても発掘調査中の特別史跡・百済寺（枚方市）を造るくらいの財はなしていた。

士大夫の鑑のような人物だが単純ではなく、金貢進にみるように機を見るのに敏でもあった。事変の際は的確に優勢な側に立った。橘奈良麻呂の謀反事件（757 年）では、黄文王や大伴古麻呂などを「杖下（じょうか）で死」に至らしめているし、恵美押勝（藤原仲麻呂）の乱（764 年）では、退位していた孝謙女帝側につき、数百の兵を率いて時の天皇（淳仁）を容赦なく追捕している。

多賀城・桃生城・伊治城

多賀城は多賀城碑によれば、724（神亀元）年、

大野朝臣（あそん）東人により創建された。この人物は百済王敬福の前任者であり、奈良時代の代表的な武人として知られる。陸奥守・鎮守將軍・陸奥出羽按察使（あせち）などを15年余り歴任し、律令国家の蝦夷（えみし）支配の中心的地位にいた。

この多賀城が造られたころ、律令国家による北上川下流域（現在の宮城県域）の領域支配が格段に強化され、城柵（じょうさく）・官衙（かんが）・寺院などが多賀城と相前後し各地に造られている。これ以降、半世紀にわたって蝦夷の反乱記事はない（熊谷公男『古代の蝦夷と城柵』吉川弘文館 2004）。施策と国守に人を得たのかもしれない。

金が貢進された749年という時期は陸奥の相対的安定期であった。にもかかわらず新たな城柵が産金地の北東と北西に2ヶ所に造られる。前記、吉川論文では「……時期と地域に着目して、そこに金資源の確保・増大という政策的意図が含まれていたと理解したい。…」と指摘される。坂上田村麻呂登場の前段階となる城柵をみてみたい。

桃生（ものう）城・伊治（これはる）城の築造

古代において金の产出は、現代であればさしづめ大油田に匹敵するような資源であろうか。黄金山産金遺跡が所在する奈良時代の小田郡は日本国の領域の北端に位置し、東北蝦夷社会と境を接していた。小田郡周辺は、「黒川以北十郡」と呼ばれ、「近夷郡」という特殊な位置づけされていた。東国（関東地方）からの移住民と在地の蝦夷系住民が混在し、それぞれ異なる支配形態がとられていた。

現在、発掘調査が進み移住の実態が明らかになりつつある（宮城県教委 HP「現地説明会資料」、図録『ヒトが移るモノが動く—古代の東国にその痕跡を探る』横浜市歴史博物館 2007、図録『「あつれき」と「交流」—古代律令国家とみちのくの文化』大阪府立近つ飛鳥博物館 1997）。

さらに、小田郡から北上川に沿って蝦夷の地を北上すれば、中世、砂金で知られた藤原氏三代の都・平泉である。蝦夷は北方交易の民でもあり、金の価値は知っていたであろうから、小田郡の金、さらに北方の金資源の確保を狙ったのが桃生城・伊治城の築城目的だ、と吉川氏は指摘されている。

黄金山産金遺跡は多賀城から北東約30km地点。桃生城は黄金山産金遺跡の東12km、伊治城は北25km地点に位置する。



桃生城はまだ大仏の鍛金作業が続く、759（天平宝字3）年、海道の蝦夷と呼ばれる三陸沿岸方面の蝦夷に備えて築城された。翌年、築城の関係者が叙位され、そこで「……陸奥国牡鹿（おじか）郡に於いて、大河を跨（こ）え、峻嶺を凌（しの）ぎ、桃生柵を作りて賊（あた）の肝膽（きも）を奪へり」と柵（城郭）の立地が表現されている。

桃生柵築造の実質的な責任者は、百済王敬福の腹心と考えられる陸奥介兼鎮守副將軍從五位上・百済朝臣足人（余足人）である。上司は若い門閥（藤原仲麻呂）の息子だった。実戦部隊にも百済人がおり、「…鎮守軍曹從八位上・韓袁哲（からゑんてつ）は身を殺すを難（かた）しとせず、已に先入の勇あり。並びに三階を進む。…」と褒賞されている。

「桃生城跡全体図」を見ると、多賀城跡や坂上田村麻呂が築造した胆沢（いさわ）城・志波（しわ）城とは城郭の形態も立地も大きく異なる。

形態は不整形である。比高のある丘陵上に尾根を結んで柵の外郭線が形成され、南面する二つの谷があり、包谷式の古代山城の立地ときわめて似る。城内からは櫓を備えた築地塀や大溝が検出されており、複郭構造になっている。外郭線は築地塀、材木塀、さらに土塁もあり、土塁は二重に巡らされている部分もあるようである。

このように桃生城は古代山城と言っても違和感無い城柵である。やはり、國家の意志として金資源を確保することを表現する面を否定できないと思われる。戦国時代であるが、毛利と尼子が争った石見銀山の山吹城を彷彿とさせる。想像するに、百済朝臣足人も「兵法に閑（なら）う」と評され亡命百済貴族のような人物であったのであろうか。

桃生城に隣接する丘陵上には奈良時代の集落（河北町新田東遺跡、桃生町角山遺跡）が存在し、桃生城の柵戸（きのへ）と関連すると考えられている。